
とある当麻の性転換

蒼井水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある当麻の性転換

【Nコード】

N4645X

【作者名】

蒼井水晶

【あらすじ】

第三次世界大戦も終わり、平和に過ごしていた上条当麻に新たな不幸が襲いかかる！

目が覚めたら、女の子になっていた！？

学園都市中にそれが通達された！？何故、Why？

フラグ立てた女の子は逆に男に！クラスの男&一方通行&他の誰かにフラグ乱立！

女の上条属性は危険すぎる！

貞操の危機！？

助けて土御門！

L e t、s 性転換！（前書き）

突発的に書きました。

不定期更新になります。

お楽しみください。

Let、s性転換!

私、上条当麻は、今、人生最大の不幸に見舞われております。
あるべき上条さんの下条さんがいないと言う。

そう、今俺は、女になっていたのだ!

インデックスはイギリスに行っており、この部屋には居ない。食費
が大幅に減るのは良いんだが……。

これはねえだろ……。

「不幸だー!!」

第三次世界大戦が終わって、しばらくたったからもう何もないと思
っていたのに……。

本当に不幸だー!!

ガラッ!!

「上やん!大丈夫か……にゃ?」

「土御門……。つちみかどー!!」

《SIDE…土御門》

ねーちゃんからの電話で、古代文明の魔術が発動。『神上』の可能性
がある人間を死に至らしめるはずの効果だった。

上やんの所に急行した俺は、望みたくない上やんの死体を見るのだ
ろうかと思いつつドアを開けたのだったが。

そこに居たのはなんともかわいらしいショートカットが似合う少女
だった。

「にゃーーvふおいのびfほいvろふいほh?おhbff!」

言語化出来ない。あの上やんが。なんとも守りたくような身長(1
55?) 何げにある胸(80ぐらいだろう)が、

俺に抱きついたのだから。

「ひくっ、えぐっ、つちみかどお、私、これからどうなるの、ひぐ
っ」

上やんは、泣いていた。どんな時にも泣かなかったあの上やんが。まだ、原因が分からなく、どんな魔術かも特定出来ない。俺にはただ、抱きしめ返すことしかできなかった。一人称が『私』になってるにゃー。それは良いとしても、理性が崩壊するにゃー！涙目＋上目遣いは危険ニャー！

《SIDE…上条》

思わず、押し寄せた不安に泣いてしまった。

上条さんは情けないことですよ。

「上やん、原因不明の魔術が、上やんをおそったにゃー。上やんの幻想殺しでも打ち消しきれなかったんだぜい。アレイスターが学園都市中にこれをなぜか知らないが通達したにゃー」

「上条さんには話の筋が分からないんでせうが？」

なんだその魔術は。

「なんだにゃ？ねーちん。なんだって！？」

土御門は神裂と電話しているようだった。

途中で大声を上げて、びくつとした俺はまた、少し泣いてしまった。

「わかったにゃー」

土御門は電話を切り、こっちを向いた。

「上やん、泣いちゃだめだにゃー」

と言われて顔を上げると、ぺろっと、目の下をなめられた。

「????????」

俺は顔を真っ赤にしてしまう。

「何をするんだ土御門！」

「泣くとせつかくのかわいい顔が台無しだにゃー」

でも、土御門って、サングラス外すとかっこいいんだよな、背も高いし、筋肉もいい具合についてるし、私は好き……。

b m l b j n k v n h j の j っ b m j h v j よ b っ h m ! ! !

私は何を考えているんだー！

（まずい。上やんがかわいすぎて、ついやってしまったにゃー。カミジョー属性が男に來るとヤバイゾ）

「上やん。よく聞いてくれ。まず、女の子になつてゐる間は幻想殺しは使えない」

「!!そうか……。」

「一人称は私^{わたし}になる」

ふむふむ。

「そして、これが一番重要だ。……、上やんに気があつた女の子は全員イケメン男子になっている。常盤台が男子校になつたにゃー」
「なんだってーーーーー!!!!!!」

このときの上条当麻の絶叫は学園都市中に響いたそうなの。

L e t、 s 性転換！（後書き）

突発的に考えたモノです。

反省しております。

「とある少年の転生人生」が主連載です。 「とある少年の転生人生」
はシリアスが多いので、息抜きにでもどうぞ。

いきなりピンチ!? (前書き)

「とある少年の転生^{アンノウンライフ}人生」の主人公も出ます。
しかし、本編とはだいぶ口調が違います。

いきなりピンチ!?

なんだかんだあったけど、学校に登校することになった私と土御門。

いつもの公園を横切っている辺りでまた不幸がやって来た。

こけたのだ、私は。しかも土御門の目の前で。

「が、眼福にゃー」

と言って盛大に鼻血を噴き出して倒れてしまった。

確か、履いたのはピンクの下着だったと記憶している。後で土御門は殴るとして。

その時パニックに陥った私は裏路地をめちやくちに駆け抜けた。

そこでまた不幸に出会った。

不良に私はぶつかってしまった。

「おいおい、何すんだ、テメエ」

男の時にはそこまで怖くなかった不良が、性別が変わるだけでこんなにも怖くなるなんて。

「あ？結構かわいいじゃねえか。相手してくれよ」

と私の手を掴み、たまり場であろう古い、廃棄されたマンションに連れて行った。

男の時には振りほどけたその手が、今は振りほどけない。いきなり好きでもない相手とヤッて処女喪失か、と絶望したその時。

「おい！何してるんだあんたら！」

救世主が現れた。

少し、大げさかもしれないが、その時の私にはそう見えた。

雷撃の槍を放ち、牽制した少年。常盤台っぽいブレザーとズボン。そして電撃。

「御坂……か？」

「そうだよ。上条さん。今助けてあげる」

全然口調ちがうじゃん。かっこいいよ。

「デメエ、超電磁砲だな！」
「うるさい！」

不良が吠えたのと同時に御坂も吠えた。
私の体はビクツと震える。

どうも、大声に弱いようだ。

「何間抜け面さらしてんだ？上条」

さらにもう一人、私の戦友とも言える少年。いや、青年かな？

「たくっ、超電磁砲が付いてこいつて言うからきてみたら、なんだよ、色恋沙汰かよおもしろくもねェ」

七城優一。学園都市第二位の能力者で、震動を操る。また、私と一緒に戦い続けてくれた大切な友人。現在、世界最強の人間の一人。魔術を破壊する大剣や、「悪魔の力」を撃ち出す銃。謎の兵器など、知らないことはたくさんあるが、ローマ正教を壊滅させたり、神の右席のうち、二人を殺害したりなど、行動は謎に包まれても居るが、「大切な人」を守るために戦っている。

私たちの学校の制服ではなく、よく分からない、自分の身長よりでかい大剣を背負ったり、腰に弾丸ベルトを巻いたりしたパンクな服装。

ちなみに実弾。

（デビルメイクライ4のネロの服装です。腰の弾丸ベルト以外）
『黒剣船斬』
コッケン ウネギリ

大剣を背負った状態から袈裟懸けに振り下ろし、私が連れて行かれそうになったビルを文字通りばっさりと真っ二つにした。

まさに世界最強。

「ひえええええっ」

私の手を握っていた不良は一目散に逃げていった。

「ツチ。小物が」

うわー、面白くなさそう。

「第三位、上条は僕が送って行く。同じ学校だしな。だから速く学

校に行きやがれ」

「でも……！」

「さっさといけ！斬るぞ！」

脅しだよそれ！

「分かった」

御坂は納得行っとなさそうだったが、学校に行った。

「さて、瞬間移動するぞ。齒^{マシ}ア食いしばれ」

えええっ！本気^{マジ}かよ！

インセント・ゼロ
『縮地』

次に目を開けたときには私たちの学校の校門だった。

いきなりピンチ!? (後書き)

どうだったでしょうか？

オリキャラの武器や能力、技は「とある少年の転生人生」アンノウンライフを読んでみれば分かると思います。

驚く小萌先生！（前書き）

今回は短めです。

驚く小萌先生！

優一と私は校門に着いてから急ぎ足で職員室へ向かった。

さりげなく私をかばうような位置に立ってくれている。こういう気遣いが出る男の子ってなんかいいよね。

（私も『元』男だけど）

私は彼に何度も助けてもらってる。本当に感謝してもしきれないくらい。

彼は自分のことを、

「当麻とは違う。僕は敵を容赦なく殺す、だから、当麻みたいな救世主^{ロー}にはなれないのさ。僕は、うちの所の姫を守ればそれで良い」そう言った。男のときの私はもちろん反論した。

「ふざけんな！ 何でお前はいつも……」

「僕は当麻^{あんた}の影。言うなれば、闇^{ダーク・ヒーロー}の英雄だよ。終わらない宿命^{たたかい}を背負っているんだ。

詳しくは言えないけどね」

そのときの優一^{アイツ}の顔は。

とても寂しげで。

私は、それ以上何も言えなくなってしまった。でも、絶対アイツの秘密をいつかは知りたい。それが幻想だってんなら、その幻想をぶっ殺す。

「おい、当麻。当麻！」

「な、何！？」

「職員室ついたぞ。さっさと行ってこい」

「あ、うん」

えーと、子萌先生はどこかなあ？

「上条じゃん！？ 本当に女になってるじゃん！ けっこうかわいいじゃんよー！」

って黄泉川先生！小萌先生じゃなくてあんたかよー！！

「はあー。黄泉川せんせ、ロリ先生はどこすか？」

「ロリじゃないですよー！！！！」

「ああ、居た。小萌先生、こいつが当麻です」

と、先生の抗議を華麗にスルーし、私を指差す優一。もう少し先生敬わなくちゃだめですよ……。

「かかか、上条ちゃん！？本当に女の子になっちゃってるのですよー！！！！」

「ええ、まあ」

「さっさと教室へ行きましょう。ここで喋っているとチャイムが鳴っちゃう」

「そうだね」

驚く小萌先生！（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は教室でドタバタ&あの人が転校してきます。
それでは。

教室でドタバタ！(前書き)

上条さんが完全に女性化しています。
お気をつけください。

教室でドタバタ!

優一を先頭にくてく教室へ。

私は身長が男の時より小さくなっているから、目線がかなり低い。目の前の優一を見上げる。

『前方のヴェント』との戦いで、「悪魔の力」を完全に解放し、魔人となって圧倒的な力でヴェントの存在そのものを消してから、髪の毛は銀色となっている。本人曰く「黒には戻らない」そうだ。

彼は一方通行アクセラレータより見つけやすい。背中の大剣とその銀色の髪が目立つ、それに足首まである真っ赤なコートに黒の上下にファスナーがついたフリース、Tシャツに、赤色のズボンに赤いブーツ。学校に行くのに学ランじゃないの!?

一方通行と戦ってからずっと彼は学生服を着て来ていない。

黒か赤を基調としたロングコートにフリースやパーカー、それにジーンズのような服装をしていた。

夏でもロングコートは外さなかった。何故!?

さすがに暑かったのだろうか、地肌にコートを直接羽織っていた。コート着るなら普通にシャツ着とけよ!!

「着いたな。さあ、当麻。行ってこい」

ここで私を教室に入れるの!?! 騒ぎが酷くなるよ!

「いいから行けっ」

ぎゃー!!!!

ドガンッ!!

首根っこ掴まれて教室に投げ入れられたよ!?

「誰っ!?!」

「どうも、吹寄」

「上条か!?! 貴様本当に女になっているのか!?!」

「そうなのですよ……」

ちなみに今の私の状態は、顔が吹寄の母性のかたまりに埋まってる状態です。はい。

「本当に。女の子に。なってる」

姫神か。男になってないな。良かった。

「ほんまにその小さい子が上やんやと!?!」

青ピ……。心配してくれるのか。

私は吹寄から離れ、青ピに向き合った。

そして青ピは膝をついて私にこう言った。

「上やん! 結婚しよう!!」

ええええええええええ!!!!!!!!!!

「なに寝言言ってんじゃおんどれエエエ!!!!」

とエセ広島弁を言いつつ、

「がふっ!!」

青ピに飛び蹴りをかましたのは優一だった。

「ったく、油断も隙もねエ」

「ありがとう、でいいのかな?」

「それでいいんじゃないかにゃー」

土御門! よくも…。

「よくも私のパンツみてくれたなー!!」

うりゃあ!

パンツ!

あれっ?

「上やん……。男のときも俺に勝てないのに、それより力が弱い女で俺に攻撃が届くと思ってるのかにゃ?」

そして私の耳元へ口を近づけてこう言った。

「まあ、強気な上やんを征服するのも、いいかもしれないんだぜい
耳元で囁かれて、私は身体が硬直する。」

「だから、起きてんのに寝言なんぞ言ってるじゃねエっての」

優一が呆れたような声音で言い、土御門に強烈な前蹴り上げを打ち込んだ。

「にゃー！ー！！！！」

土御門は文字通り、天井に突き刺さった。

優一強すぎじゃない！？

「何か教室が不良の大喧嘩の後と化してるのですよー！！！！」

小萌先生、その言葉を最後に凍結。

優一はというと、

「あーあ、だりい」

と言いながら首に掛けていたヘッドフォンを付け直して音楽を聴き始める。

かなり大きい音量で聞いているのか、英語のヴォーカルの声が音漏れしている。しかもかなりアップテンポなロック。

アクセラレータ

ただ、私はこの教室にいるはずの一方通行が何も言っていないのが気になり、席の方へ目を向けると口をあんどぐり開けたまま、私に見入っていた。

あらま。

教室でドタバタ！（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は一方通行中心で話が進む予定です。
それでは。

秘密の会話！？（前書き）

「とある少年の転生人生」のネタバレがあります。
気をつけてください。

秘密の会話!?

あ、そうそう、言うのを忘れていたんだけど、姫神は優一に一目惚れしちゃったんだって。

それまでは私が好きだったみたい。

おっどろいたなあ。

それはともかく、一方通行が完全に凍結しちゃってる。なんとかして解凍してあげないといけない。

「おい、一方通行、だいじょうぶー？」

「はっ!! う、うるせエ、除いてくンじゃねエ!!」

一方通行は顔が真っ赤だ。どうしたのかなあ？

「H a h a h a : H a - h a !」 (和訳; ハッハッハッ…ハッハッ!!)

と私と一方通行がいいふんいき (なぜか変換できない) になっている後ろでは、楽しそうな笑い声 (アメリカ風挑発) を上げながら大暴れしている戦闘^{七城優一}狂がいる。

「三下ア、お前、オレに近づくんじゃねエぞオ」

(そうでもしねエと理性が吹っ飛んじまいそうだ)

「え…:…どうして? 私のこと…:…嫌い?」

やっぱり、わかりあえないのかなあ…:…グスッ。

(涙目+上目遣いで見つめるなアアア!!! 理性が崩壊するウウウ!!!)

「い、いや、違うけどよオ、お、オレは悪党だ。ヒーローにはなれねエよ」

「今、私は『^{イマジンプレイカー}幻想殺し』の^{レベルゼロ}ないただの無能力者だよ? それでも一方^{アクセラレータ}通行は私をヒーローと呼ぶの?」

「アア、三下に影響を受けたのは確かだからなア」
「そうなんだ…:…」

「なあ、一方通行」

「なんだ。土御門」

「カミやんは様々な魔術結社から命を狙われているんだぜい」

「それがなんだってんだ？」

「今カミやんには『イマジンプレイカー幻想殺し』がないにや。ただの一般人だぜい。そんな時に護衛がいないと大変な事になるにやー」

「だからテメエは何を言いたいんだよオ！！」

「つまりだにやー、カミやんをほっぽらかしにしておくとか誘拐されるばかりか、慰みものにまでされる可能性があるにやー。今のカミやんはかなりかわいいからにやー」

「なン：だと！！そんなことは絶対にさせねエよ！！」

「当たり前だぜい。だから一方通行にはカミやんの護衛をたのみたいんだにやー」

ふたりそろって何を話してるんだろう。

「上条、こっちへ来い。ここは危ない」

と、私は吹寄に引つ張られていった。教室の外に。

「Hey! What's up!」(和訳；オイ！どうした)

相変わらず、優一は暴れてるし、土御門と一方通行は話し込んでいるし、ヒマだなあ。

「そんなの、マクニチユード世界滅亡に頼めばいいじゃねエか。なんでオレなんだ。アイツは便利屋なんでしょう？」

「優やんは闇を殺す者なんだぜい。それ以外の仕事だったたくさんあるんだにやー。デヴィルキル悪魔殺しで、金稼いでるし、今はとびっきりの要人の近衛騎士なんだぜい」

「だれだァ？そのとびっきりの要人ってのは？」

「イギリス七大貴族の一人にして、イギリスの最重要機密。『ウェスタの巫女』のフィオナ・スコット・ハーベルだにやー」

土御門の話が聞こえた！

『ウェスタの巫女』って確か、クーデターで第二王女に真っ先に狙われた人よね……。

確かその時の任にっていたのが優一だったのよね。ミカエル天使長の力を

受けて、力を増した騎士団長と互角に戦って退けたとか何とか。
優一恐るべし……。

「で、なんで第二位がその任務についてるんだア？」

「詳しくは言えないんだぜい。学園都市で魔術師が暴れて、それを引き取りに来たのが出会いだにゃー。まあ、その後便利屋営んでる優やんに最大主教自ら、依頼したらしいんだぜい」

「へー、そこまでは知らなかったなあ。」

「ンで？」

「フィオナ嬢、通称ファナ様だが、『その美貌は天をも落とす』と称される絶世の美少女だにゃー。他の貴族達からの求婚が山のようにあるんだぜい。なかには、強硬手段に訴えてくるヤツもいるんだにゃー。自分の下卑た欲望のままに行動するやつとかにゃー」

「それで？だからンだってんだ？」

「『ウェスタの巫女』は神性が求められる。恋愛ならばいいらしいが、そんな犯罪じみたことされてはイギリスの魔術的防護はガクンと下がる事になるんだにゃー」

「めんどろだなア。それで？」

「だから、優やんを破格の報酬で雇ったんだにゃー。こっから先は俺の推測だが、二人は出会った当初から惹かれ合っていたんじゃないかと思うんだぜい」

この話を聞いて、一方通行の目が俄然輝き始めた。
もちろん私も。

土御門の話を聞き逃さん、とするように。

「ファナ様は心を抑圧されていたんだにゃー。面倒臭い貴族の礼儀とか、『ウェスタの巫女』の事とかをずーっと、叩き込まれて育つて来たんだにゃ。毎日監視されてるようなもんだ」

「それは、ムカつくなア」

一方通行はそう呟いた。

「皆、『ウェスタの巫女』としての絶大な権力の付属品としか自分を見られない社会の中で育ったファナ様が、逆に『ウェスタの巫女』

では無く、『フィオナ・スコット・ハーベル』として見てくれる人間が現れたらどうなる？」

「それは、喜ぶし、心を開くよ……」

私は思わずそう呟いた。

「そう、だから、ファナ様は優やんに惹かれたんだぜい」

「じゃあ。優一君はなんで？」

「優一は強すぎる。強すぎる故に孤独だ。だから、同じ孤独を感じたファナ様に惹かれたのもあるようだが、その笑顔を守りたい、そう思っていたのがいつの間にか恋愛感情に発展していったんだにゃー。アイツの魔法名はNotera129（我が剣は君の笑顔のために）だしにゃー」

わー！、優一の魔法名なんて初めて聞いたよ。しかも『我が剣は君の笑顔のために』ってなんかカッコいい！！

「ファナ様の方も襲いかかってくる連中から命がけで守ってくれる騎士に悪い感情は抱かないんだにゃー。ファナ様が手に入らないことに業を煮やした貴族どもはクーデターに乗じて、ファナ様を誘拐する計画を立てたんだにゃー。そして貴族どもは動かせる全戦力を投入して、近衛騎士二人、優やんともう一人、ロイ・ミイスを殺しにかかったんだぜい」

ロイ・ミイスってあの爽やかな金髪のイケメンさんのことだよな！やっぱり強かったんだ！

「ロイ・ミイスは一人でイギリスに残って、二人を国外に逃がしたんだにゃー。その、二人の逃避行で愛が確実にめばえたんだにゃー」

「つまり、優一は、ファナ様の心を盗んだってことだね」

「大当たりだぜい、カミヤン。貴族達は魔術戦艦の大艦隊までも起動させて2人を追ったんぜよ。頭に重傷を負った優やんはその重体のまま中東の紛争地域を走り抜け、様々な妨害を退けながら学園都市に辿り着いたんだぜい。だが、優やんは瀕死の状態だぜよ。魔術砲撃を浴びた優やんは、その効果により、血が止まらなかったのだにゃー。そこでファナ様は『ウェスタの巫女』の空間移動術式で、

エリザリーナ独立国同盟へと歩を進めた。治療してもらった優やんだったが第三次世界大戦に巻き込まれるんだぜい。その中で、右方のフィアンマの攻撃によりファナ様は軽い怪我をするんだにゃー。それでブチきれた優やんは、大天使、神の力と『ベツヘレムの星』を撃墜。神の力に至っては消し飛ばされたにゃー

「それで？そのクソ長い説明で、言いたいことはなんだ？」

「つまり、優やんは手が離せないということだにゃー。それに……」
ここでまた土御門は一方通行の耳に顔を寄せた。話が聞こえなくな

った。
「もし、カミやんを守りきったら、好きになってくれるかもしれな
いにゃー」

「なっ!？」

一方通行の耳が赤くなった。

「まあ、そう簡単にフラグは立てさせないんだぜい」

「ンだと!？」

「俺もカミやんはかわいいと思うからにゃー」

優一と小萌先生はいつの間にかどこかへ行っていた。

それにより、吹っ飛ばされたクラスの皆が戻って来ている。

優一は何処へ行ったんだろう？

まあ、いいや。席に着こーっと。

ちなみに話してた2人も席に着いている。

秘密の会話！？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はオリキャラの登場です。
それでは。

転校生！（前書き）

オリキャラが出ます。

「とある少年の転生人生」メインヒロインの、ファナとエリシアです。&ネタバレがあります。

転校生!

皆が喋りつつ待っていると小萌先生が入って来てこう言った。

「皆さん! いいお知らせがあります!」

「なんやー!」

青ピ……。そんなすぐさま立って叫んでもいいだろうに…。

「野郎ども喜べ!! 転校生は女の子2人なのですよー!!」

うおおおっ!!!

教室がどよめいた。

「巨乳か!? 巨乳なのか!?!」

「何を言う! 貧乳に決まっている!」

わーわー、ぎゃーぎゃー叫んでいる。まったく、話題が下品だなあ。

「うるっさー!ーい!ー!ー!ー!ー!」

あ、吹寄がブチ切れた。

ゴンゴンゴンゴンゴンゴン。

「マシンガン……ヘッドバット」

「皆さん、静かにしてください!」

と小萌先生が言ったとたん、皆はピタッと静まった。

「入って来てくださーい」

入って来たのは、どこまでも透き通るような空色の髪を、毛先の跳ねたボブカットにした絶世の美少女。

私は思わず叫んでいた。

「ま…まさか、フィオナさん!?!」

そう、彼女こそ土御門の話に出て来た『ウェスタの巫女』、フィオナ・スコット・ハーベル。

私の方を向いたフィオナさんは、はにかむような笑顔を、その整った顔に浮かべた。

うおおおっ!!!

まるで、地震が来たような揺れ。

それが、優一の起こした地震ではなくて、クラスの男子の歓喜の叫びだと気づくのに、私は少し時間がかかった。

一人の男子がフィオナさんの前に出て来てこう言った。

「僕と永遠を誓ってください!!」

その男子は、はあー。思わず溜め息が出る。

……青ピだった。

「なーにすーんねーん」

青ピを無言で引き摺って行ったのは土御門。

それを困ったような笑みを浮かべながら見送ると、クラス全員に向けて言った。

「ごめんなさい。私には、心に決めた人がいます」
さすが貴族のお嬢様、断り方も品がある。

まあ、私の感想はともかく、男子が吐いた溜め息に、教室は包まれた。

「残念：言い交わした人がいたか」

とかなんとか男子Aが言ってるけど。

「お嬢様!!」

そのとき教室に駆け込んで来た白銀色の髪の青年、皆さんはもうお分かりだろう。（皆さんって誰だよ。）我らが第二位、七城優一である。

全力で走り込んで来た優一に対し、フィオナさんは悪戯っぽい笑みを浮かべてのたまった。

「もう私はお嬢様じゃないよ？」

「……ファナ様」

「ゆ・う・い・ち？」

唇の前に人差し指を持って来て、投げキッスをするように、その人差し指で優一の唇をつつきながら言う。

その仕草一つだけで、匂い立つような、それでいて清純な色気がフ

イオナさんから立ちのぼった。

(何を言ってるんだ私は!?)

それに対して優一は呆れたように頭を掻くと、優しい微笑みを浮かべて両手を広げた。

「……おかえり、ファナ」

「ただいま!! 優一!!」

フィオナさんは見ているもの全てを膚にしそうな魅力的な笑みをこぼして、力一杯優一に抱きついた。

「優一、優一、優一!!」

フィオナさんは優一に抱きつくと、胸に顔を埋めて、ただ、優一の名前を何度も呼ぶ。

「ファナ……」

優一は対照的に、フィオナさんの名前を一度だけ呼ぶと、「もう離さない」と言わんばかりにきつく抱きしめた。

いつもは邪魔をしようとする、愚か者の男子も、このときばかりは無言であった。

だが、その2人だけの空間を明るい声が貫いた。

「もおー! 2人とも! 私が入りにくくなるじゃない!」

その透き通る声を聞いて、フィオナさんを抱きしめていた優一が顔を上げた。

「エリシア! あんたまで来たのか!？」

「当たり前じゃない! ファナだけじゃなく、私の心まで攫って行ったくせに!」

栗色の髪を、肩にかかるかかからないかぐらいのボブカットにした快活そうな美少女。

彼女は、エリシア・ミス。

土御門の話に出て来た、ロイ・ミスの妹だ。

フィオナさんと比べても遜色の無い美少女の登場に教室中がどよめ………かなかった。

エリシアの言葉に、皆度肝を抜かれていたからだ。

「あんなに2人で激しく求め合ったのに!!!」

ブーーーーーッッッ!!!!!!!!!!

「ゴホッゴホッゴホッ」

教室中の皆が吹いた。

あ、違った。優一は咳した。

「いや、2人とも酔ってたし、キスから先には行ってねェだろ……」

「ファーストキスだったんだよー!!」

「……、俺はセカンドキスだったが?」

「何をトンチンカンな答え返しとんねん」

おおー! 青ピがついにツツコミに回った!

「知ってるよ! ファナとキスしてたことぐらい!!」

ブーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!

またも教室中が吹いた。

あ、違った。優一は真っ赤になっている。

「……分かった」

チュッ……。

「んっ……ふっ……うふうっ!」

エリシアの口から時おり甘い声が漏れる。

「ぷはっ。いきなり何すんだ!!」

と、怒って腰の長剣を抜いて斬り掛かるが……。

「甘ェよ、ファナやお前みたいにな」

ボンッ!

爆発したような音が聞こえると、美少女2人は真っ赤になっていた。

「気障ったらしい台詞吐いてますがー、二股なのですよー」

「「「そうだ、そうだ!」」」

男子連中が一丸となって反論する。

「あー、それは、何と言うか……」

優一はなぜか言いにくそうにした。

男子が轟々と避難の声を上げようとしたとき、エリシアは思い出したように手を叩いた。

「女王様公認なんですよ」

「「「は？」」」

皆、目が点になる。

「だからあー、イギリスのエリザード女王ですって」

ええええええええええっ！！！！！！

驚きの声が教室中から広がる。

それはそうだ。いきなり、最高権力者の名前が出て来たのだから。

「エリザード様はこう言われた。『あの少年は、まるで自由を求める鳥のように飛び立って行ってしまう。それを防ぐには足枷の一つでは足らぬのだ。ファナ一人では到底あの自由な鳥を飼いならすことは出来ぬ。逃げ出さないようにするには、枷が2つ必要だ。エリシア、お主がもう1つの枷になるがいい。その恋と言う感情に蓋をしたくはないであろう？』と」

「ゆーいちも言ってたよね？」

「何が？」

「『お前ら2人を守るためなら、世界だって敵に回してやる』ってさ」

「…………、僕からしたら、2人がいれば…僕の生きる理由になる」

「相変わらず、凄い台詞を言うね。ななしろ」

滝壺。浜面の彼女であり、エリザリーナ独立国同盟にいた少女。

「はっ！惚れてんだ。悪いか？『ウェスタの巫女』なんて関係ねえ。僕は2人が居ないと生きて行けないんだよ！！」

ファナとエリシア

この言葉で納得したのか、静かになった。

「「大好きっ！」」

2人揃って抱きつくなよ。桃色空間作るなよ。

「あー、ゴホンゴホンッ」

吹寄ナイス！わざとらしい咳払いだけど。

「あ、ごめんなさい」

「えーと、私は、フィオナ・ハーベル。特技は歌を歌うこと！よろしく願います！」

パチパチパチ。盛大な拍手が舞い起こる。

「私は、エリシア・ミイス！特技は剣術と料理！よろしく！」

あ、私たちにちよっかい掛けたら問答無用で私たちの恋人に切り刻まれるからっ！そこんところろしくっ！」

一瞬の静寂の後、また拍手が沸き起こった。

「ったく、お転婆だなあ」

と笑顔で言いながら、エシリアの髪をぐしゃぐしゃやっている優一。身長差が10センチぐらいあるのかな？

「何するんだー！！」

うがー！と暴れるエリシア。それを笑いながら押さえる優一。

優一が時折見せていた影は完全に姿を消した（と思う）。

小萌先生の連絡があり、HRが終わると、すぐさま2人への質問タイムが始まった。

3サイズを聞く馬鹿者がいたけど、優一に蹴り飛ばされるか、エリシアからの男の勲章に痛烈な一撃で、のびていた（笑）

その後2人は、私の近くへ来ると、私を見ながら優一に聞いた。

「この子が『元』上条当麻？」

『元』ってなんだよ。地味に傷つくぞ。

「ああ、そうだよ」

「ふーん。意外とかわいいじゃん。男のときは遠目にしか見てないからさー」

ま、その後色々質問されたんだけど、なぜか土御門と一方通行が競って質問に答えていた。

なぜ？

（カミやんにかっこよくみられたいんだにゃー）

（三下のポイントを上げる！！）

土御門と一方通行の真意を上条当麻は知らない。

アクセラレータ

かのじょ

転校生！（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は甘めに仕上げてみました。

「とある当麻の性転換」は上条当麻の恋愛（鈍すぎて、好意を向けられていないのに気づかない）と、オリキャラの甘い恋愛模様を中心に展開します。

次回は放課後からの話です。
それでは。

オリキャラ紹介。(前書き)

今までに出て来たオリキャラを紹介します。
ほかにもオリキャラは出る予定ですが、とりあえず主役の説明です。

オリキャラ紹介。

ななしろゆういち
七城優一

学園都市第二位の震動能力者。能力名、マグニチュード世界滅亡。

その名の通り、扱う力は地震の力。他にも、腕や脚に震動を纏って、高周波ブレードにしたり、同じく、衝撃を纏わせて、地震のエネルギーを直接相手に見舞ったりと、その破壊力は一方通行をも上回るとされる。

彼は魔術界の伝説『忘れ去られた剣士』の息子であり、『悪魔の力』を扱うことが出来る唯一の人間。

人間と言うよりは、半人半魔。

悪魔の力により、圧倒的な戦闘能力を有する。

（詳しくは、『とある少年の転生人生』アンノウンライフ第5話を参照してください）

その力は神の右席を消し去るほどの力。

通称『闇を殺す者』ダークスレイヤー

便利屋『Devil With Dance』デヴィルキル《悪魔と踊ろう》

を営んでおり、『悪魔殺し』や、犯罪、魔術結社の壊滅、悪魔を呼び出そうとする愚か者（複数の場合もあり）を抹殺する、などの仕事をしている。

また、フィオナ・スコット・ハーベルのロイヤルガード近衛騎士。

フィオナ・スコット・ハーベル

元はイギリス七大貴族の筆頭に名を連ねていたハーベル家の出身。

『その美貌は天をも落とす』と称される絶世の美少女。しかし、後述の特殊能力や、貴族的な儀礼。自分自身を道具としか見ない、貴族達に絶望し、心を閉ざしていた。

そんな中、七城優一と出会い、交流しているうちに恋に落ちる。それを認めたくない貴族達にクーデターを利用し誘拐されかけるが、七城優一が助け出し、学園都市へと逃げて来た。

特殊能力『ウェスタの告示』

『ウェスタの巫女』が持っている特殊能力。

神の右席以外の、どんな魔術でも、詠唱、霊装などを必要とせず、ノーモーションで即座に発動が出来る。

これにより、魔術的な攻撃はすべて無効化される。

ロイ・ミイス

フィオナの近衛騎士。

代々、ハーベル家に使えて来たミイス家の出身。

『ガーディアン守護者』と異名を取る練達の剣士。

また、騎士団長と互角の剣の腕を持つ。

フィオナが心を開いていた数少ない人間の一人。

クーデターで、貴族の大軍を相手にし、3人を国外へ逃亡させた。

その後の消息は不明。

エリシア・ミイス

ロイ・ミイスの妹。フィオナお付きの侍女。

栗色の髪をボブカットにした美少女。

侍女でありながら、類い稀な才能を有し、その魔力はキャーリサ王女と並び称されている。

そのほかにも、剣術、体術にも秀でており、そこら辺のチンピラなら軽くひねり潰せる。

『駆け抜ける風』の異名の通り、火、土、水、風の四大属性のなかでも、特に風の魔術を得意としている。

オリキャラ紹介。(後書き)

いかがだったでしょうか？

完全オリジナル設定も織り込んでいます。
それでは。

恐怖の体育！？（前書き）

オリキャラが二人です。

恐怖の体育!?

こんにちは。上条当麻です。

今、体育の時間です。女子更衣室で着替えてます&めちゃくちゃにされてます。

「うわー！上条君胸あるよー！私よりもっ」

「この前まで男だったのに…けしからん」

えー、状況は察してくれるとありがたいです。

今日は男子と合同で体育だそうです。

どこからか、歓喜の叫び声が聞こえた気が。

「しかし、女になるとは、珍しい現象もあったものですね」

「そうだね。かみじょー、お前いつまで女なの？」

「上条さんはそんなこと知りませんのことですのことよ」

場所は変わって、校庭。

「はいはい、皆仲良いじゃんよー、今日は能力使用ありの女子対男子のドッジボール！ただし、一方通行は能力使用無しじゃん」

「ちよっと待ちやがれエー！それは不利すぎるだろオ！」

「その分上条を守るじゃんよー」

「つまり、最弱を守るためならいいんだな？」

「じゃんよー」

え、え、私？

「え、えつと…よろしく？」

と言って一方通行にペコリ。
アクセラレータ

(クソツタレエ、かわいいじゃねエか)

「しかたねエ。守ってやるよ！」

ちなみに私、上条当麻はなぜか男子チームにいます。普通私、女子じゃない？

「それじゃあ、スタート！」

ボールを投げる黄泉川。女子はもうスタンバっている。

「えーと……、雪降れ！その上条君に当たれえ！」

白雪月夜、凍結操作能力のレベル3。能力名は、『絶対零度』アブソリュートゼロ

雪を作ったり、物を凍らせる能力。

色白の肌に、黒髪の美少女。

「いきなり私かよっ！よーしこんなときこそ右手のではn……あ、使えなかった」

「馬鹿かア！三下ア！」

「ったく、仕方ねえなっ！」

優一はそう言いつつ背中の大剣、たしか、『REBELLION』リベリオン

だったか？に手を伸ばし、引き抜くと、

『DRIVE』ドライブ

左から右に斬り上げると同時に強力な衝撃波を放った。

「は？」

「この節操無しのフラグまみれがっ！」

「ちょっと本気になったわたしの純情返せっ！」

「浮気者！信じてたのにっ！」

「でもそんな上条君がイイ！」

「私の想い、受け取ってええええ！！」

「おいおい、マジかよっ」

バゴオオオンッ！！！！

その能力の集中砲火は――私を庇っていた優一に直撃。

「優一！大丈夫！」

優一は――傷一つなかった。

「「「「うっそお」」」」

「ハッ！その程度か！軽いな」

あー、うん。そういえば優一って後方のアックアと互角に斬り合っ

たんだったつけ。

「じゃ、今度はこっちの番だ」

『黒剣^{コクケン} 戦神^{センジン}』

大上段に振り上げた刀を地面に叩き付け、地を這うように衝撃波を飛ばす。

「任せてっ！」

エリシアが前に出て来る。

『ゲイルウエポン』

風を纏った長剣でその衝撃波を止めた。

「随分と力セーブしてるね。それじゃ私に勝てないよ？」

「What's you say? : Huh!」 (和訳：何か言ったか？ハッ！)

あーあ、挑発に乗っちゃったよ優一のヤツ。

「ゆーいちが私が足止めしてるからその間にっ！」

ガギン！ガガギン！ガギン！

剣戟の音が校庭に響き渡る。

「エリシア、僕を足止め出来るとでも思ってたのかよ！確かに腕は上げたみたいだけど！」

あらら、2人で決闘始めちゃったよ。

「今のうちだア、さっさと片付けちまおうぜエエエ！！！」

一方通行が吠える。

とは言っても、杖を持っている身体では避けるのも一苦労だ。

一方通行がボールに当たりそうになった次の瞬間！

「危ないにゃー！！！」

「ふげぶっ！」

土御門に蹴っ飛ばされた。

「テメエ！何しやる！」

「助けてやったんだから感謝して欲しいにゃー」

「にゃーにゃー言うな気色悪イ！」

数分後。

私たち4人（私、土御門、一方通行、青ピ）は仲良く外野へ。

「仲良く4人外野なわけですが、そろそろ反撃といきませう」

「何言ってるんやカミヤん、ボクは女性の味方でっせー」

「あら？私も『女』よ」

「……」

「まあまあ、ちょいと待つにゃー。ーおーい。ここらで罰ゲーム
決めとこうぜい！勝ったチームが負けたチームを好きにできる！も
ちろんカミヤんも自由だにゃー」

「「乗った☆☆☆！！」」

即座に返事する女子一同。皆一様に目がギラギラしている。

「ちょっと待った、上条さんの人権はどうなるんでせう！？」

「あー、まあ、どんまいだにゃー」

「土御門オオオオ！！！」

「「うおおおおおっ！！！」」

女子を思うがままに出来るとあって男子も負けず劣らずテンション
が上がっている。

「なんか私だけ背水の陣みたいなんですがっ？」

「付き合いきれねェ」

「いやいや、付き合ってもらおうでー。一方通行はんでええかな？呼
び辛いから

一方さんor一通さんでどうや？」

「どっちも却下だクソツタレ」

「じゃあ、一行（I K K O）さんだにゃー」

「死なすぞテメエ！」

「……、上条君人気だね。まあ、私も結構好きだし。一方通行もかっこいいけど」

そう言いながら、外野に向かって吹雪を起こした白雪。雪のせいで視界が悪いし、いい加減手が冷たい。でも、白雪自身は平気。なぜなら、自身の能力を使うため、いつでもどこでも、耳当てと手袋を携帯しているのである。（私はアックアか）

「ホラ、さっさとあの幻想をぶち殺せよ^{なだれ}」

「滅相もございませんよ最強！『これから先は一方通行だー！！』
て言ってやっってくださいよ。」

（まあ確かに、この吹雪を消せばポイント上がるかもなあ）
なんて思っている一方通行と下心が分からない上条当麻。

互いに互いを盾にしようと組み合いながら吹雪の中に消えて行った
我らがHEROES。

その吹雪のなかで、おもむろに一方通行が電極のスイッチを弾く。
そして私を後ろに庇つつ吹雪を、剣戟の音が響く場所へとぶっ飛ばした。

「邪魔だっ！」

「邪魔っ！」

優一は砂を粒子震動させ『砂嵐^{サーフルス}』を形成。

エリシアは魔術を高速詠唱、『竜巻^{ストーム}』を形成。

2人揃って飛んで来た吹雪に打ち上げた。

「息ぴったりすぎるにゃー」

「喧嘩するほど仲がいいってことかいな」

「で、お前らは人様の後ろに隠れて何やってるんですかア」

「カミさんと一方通行も息ぴったりやん」

私は一方通行の腰にしがみついたまま。

（くっそー、ポイントとられたにゃー）

「さアて、白雪とか言う雪女は場外確定だなア」

白雪は危険を察知したのか、雪の壁をつくり出している。

「危ない、月夜ちゃん！ボイスシャット声帯衝撃機動！

目標、上条当麻と一方通行！

総員対シヨック・対鼓膜破碎防御！発射10秒前！9、8、7……」

白雪を救うため、親友の茜川が能力を使おうとする。

ちなみに、何でこんな台詞を言っているのかというと、能力の機動に時間がかかるためである。

けっして宇宙戦艦ヤマ（自主規制）のせいではない。

って私は誰に向かって喋っているんだ？

一方通行は傍観者となっていた男子Dを掴んで放り投げる。

その先には雪の壁。考えるのがめんどくさかった一方通行はどうなるかも知らずに投げ込んだ。

「不幸だー！！」

男子Dドンマイ。

だが、私、上条当麻が不幸体質ならば白雪は逆。

「3、2、1、発射！」

茜川が声に乗せて放った衝撃波は男子Dを直撃。男子チームの方へくるくる回って戻って来た。

その戻って来た男子Dを『リベリオン』で場外ホームランにする優一。

あれ、いつの間に戻って来たんだ？

「エリシアちゃんはどうしたんやー？」

「あ、服を少々セクシーにしてやった」

優一が指差した方には、何ともセクシーな腹だしシャツとホットパンツ（体操着を斬って作った）をきたエリシアがいた。

なぜか、立とうとしても立てない状態。

「なにしたんや？」

「暴れてたから、キスして黙らせた」

「セクハラや!？」

「お前が言うな!」

「はい、そこでコントしなくてよろしいでせう」

そう言って注意したところで、私は雪に足を取られ、白雪のそこそこある胸へダイブ。

「あ、ごめんなさい」

と女子から見てもかわいい顔（姫神談）でへにやりと笑顔。

「う、だめ、競争率高いもの、か、上条君、本気でもないのにそう言う事言っちゃかわいそうだよ、一樣忠告しておくけど、ど、どうせフラグ立てまくるんだろうけど!？」

雪が暴走して吹雪化。

「きゃあっ!」

フィオナさんが足を取られてころー！！！ばなかった。

「ファナっ!！」

滑り込んだ優一がナイスキャッチ。

「愛の力だにゃー」

「愛の力やん」

「愛の力だなア」

「この暴走台風警報の時に何をくっちゃべってるですかー!!というかこれはさすがの上条さんでも無理その前にドッジボールと言う事実はどこにー!!!」

反論する私だが、奇麗にスルーされた。

「そういえばそうだったにゃー」

「こんな吹雪じゃどこにボールがあるかわからへんけどねー」

「というかよオ、俺が投げて、第二位がかっ飛ばしたアイツはどこに?」

「「埋まった」」

「（只今絶賛暴走中!!）えーと、こう言うときは、く、雲の温度下がれ……」

頑張った結果。

豪雨になった。

普段、雪しか降らせないので傘は持ってない白雪。雹が降らないだけマシだろうが。

「止められねエのか、白雪！」

優一はフィオナさんを抱き抱えたまま、叫んでる。濡らさないように。

「というか、雲の温度下げたのに雨っておかしいだろ！制御めちゃくちゃになってんぞ」

「クソッ、これ以上はバッテリーが持たねエ。……ン？なんか雨が温かくなってねエか？」

おそろしや、フラグとはここまで人を狂わせるものなり。（あんた誰だよ）

「女子の勝ちじゃん。七城、あの雲けせるじゃん？」

「お任せあれ」

ドゴォンッ！！

大気を殴りつけて震動を伝え、雲を爆散させる優一。つくづく規格外だよなあ。

ただ、それだけでは終わらないのが私上条当麻。

優一の能力でぶっ壊されたコンクリ片が頭に直撃。気絶した。

逆にそれだけで済んだ私の方がおかしいらしい。

保健室で目を覚ますと、たくさんの女子が顔を覗いていた。

「起きたかにゃー。カミヤん」

「ハッ、なんだよ。生きてンじゃねエか」

「そんな事を言いつつ見舞いにくるツンデレのアクセラレータ。略してツンデレータ」

「死ね！」

土御門と一方通行の馬鹿な会話はほっというて。

「あ、上条君さっきはごめんね？お詫びに雪だるま」

自分の能力で、雪だるまをつくってきたらしい。

念のため左手で受け取りながら、どうしようか考える私。

帰りのHRでは、明日から行く修学旅行の話をしていた。

帰りに御坂に会って、修学旅行はどこに行く？と聞いたら、
「近場の温泉」だそうだ。

まさか……ねえ

だが、この私の予感当たるのであった。

恐怖の体育！？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は修学旅行初日をお送りします。
それでは

行事ってかぶるものでしたっけ？ (前書き)

少しシリアス？ かもしれません。

行事ってかぶるものでしたっけ？

時は飛んで、バス車内。

私たちは修学旅行へと向かっていた。（修学旅行と言っても、近場の温泉なんだけどね）

「この席順には何かの陰謀を感じるんやけど」と青ピがぼやく。

彼の隣は土御門、男子A、B。

見事に女子が居ない。

あ、私の隣は一方通行。^{アクセラレータ}

「先生の決めた席に文句あるですか……」
今にも泣きそうな担任教師。

「にゃー！そんなことぜんぜんないですたいっ！ていうか一方通行！黄泉川先生含め三人の女性と住んでるって本当かにゃー！」

「アア？うるセェンだよ。スクラップにされたいのかア？オレは寝ンだっつの」

ついでにベクトル操作のおまけ付き小石を、土御門に向かって投げた。

「このバカーっ！」

いまにも寝ようとした一方通行に私の右手が炸裂する。
今は反射してなかった。良かった。

「デメエ、なにしやがー」

「あなた、今寝るって言った？その台詞を私たちのために一生懸命バスレクを準備してくれた小萌先生の前で言えるのかしら！？」

「アア！？なに言ってやがンーー」

一方通行が視線を向けた先にはうるうると涙目の小萌先生が。
古今東西、一流の悪党は泣いている女性には勝てないのだ。

「チッ……、さっさと始めやがれ」

「よーし、みんな！ビンゴ大会の時間だよっ！」

の魔術師に追いかけられたんだっけ。
チャキツ……。

太もものホルスターから、拳銃を抜いていつでも撃てるように構える。

それと同時にエリシアに指示を出した。

「エリシア、ファナ様を」

「りよーかいっ」

エリシアもいつもの様な軽い調子で答えるが、その目は冷徹な光を帯びていた。

「あ、とうまだ。おーい！」

さらにタイミングよく現れる一様必要悪の協会所属のインデックス。「やけにおとなしくイギリスに行ったと思ったらそういうことかドチクシヨオーッ!!」

さらにスタイルを始め、ぞくぞくと入ってくる怪しい一団。

その先頭の男（つまりはステイルだが）に優一は問答無用に発砲した。

「何の真似だい！」

「あ？ テメエ、主を狙った人間を殺そうとするのに理由が必要か？」

思わず私は一方通行にしがみついた。

「最弱！？馬鹿！離れろっ！」

「お願い……、このままにさせてっ」

(理性が飛ぶんだよアホがあアアア——！！！！)

「落ち着いてください。闇を殺す者」

「……、クソツタレが……。2人に何かしてみろ……。全員消す」

怖
い
か
ら
っ
。

「やめて！もう終わったんでしょ！お願いだから、私の知り合いで殺し合わないでっ！」

私は思わず叫んだ。

「…………、チツ、甘ったれ野郎が」

「フン……」

うわーうわーうわー。ステイルも優一もキレてるよ。
大丈夫かなあ。

行事ってかぶるものでしたっけ？ (後書き)

次回はさらにキャラが登場します。
それでは

遭遇。
(前書き)

えー、ごめんなさい。
はっちゃけました。

遭遇。

「あれー？ステイルちゃんじゃないですかー？」

「っ！？（しまった！？日にちを合わせて来たはいいが、こいつの担任はこの人だったか……）」

「ていうかさあ、あの銀髪のシスターかわいくない？」

と横に居た男子Aに話しかける男子Bこと形原。

「うん、上条の名前を呼んでたって事は上条の知り合い？って土御門？何でそんな凄い顔をして固まっているのさ？」

土御門と話す男子Aこと井伊。

「べ、別になんでもないにゃー（何で必要悪！？なんでこっちに招待状が届かなかったんだ！？）」

「先生！私たちちよつとトイレエエエー！！！」

「ちよつ、上条ちゃん！？上条ちゃんは女の子なのですよー！」

小萌先生の話をスルーしつつステイルと土御門を引きずってその場を離れる私。

「ぜえ、ぜえ、何でここに居るのか100文字以内でどうぞ！？」

「何でって、ただの慰安旅行だけど？」

「嘘よ！絶対、新手の魔術師が出たとかそんな話でしょっ！」

「ほほう、察しがいいね」

「やめて、私の楽しい旅行を壊さないで！」

と身長差から自然に見上げる様な形になる私。

（うっ、かわいい！いや、僕にはインデックスがインデックスがインデックスが以下ry）

「思わせぶりなこといつてるけどにゃー。なんにもないんだぜい」

「じゃあ、ステイル達今は完全にオフ？」

「そういうことにゃー。ズバリ、インデックスと一緒に行きかけたけど誘う勇気が出なかったからネサセリウス全体の旅行を企画し

たのかにゃー?」

これだけの長台詞をノンブレスで、しかも嘯まずに言えた土御門は凄いと思う。

「違うっ!! 企画したのは神裂達だ、インデックスと一緒に行きかけたのは彼達だよ」

「ちよっと待った。今彼って言ったかしら?」

「そうだよ。君にかけられた魔術の範囲は全世界に及んだ。神裂、オルソラ、……君に好意を寄せていた女性達は男になったよ。しかもイケメンの」

「不幸だー!!」

「ちよっ! カミやん、何で僕だけ置いてくの!？」

「ンだア? 青髪ピアスから赤髪ピアスに乗り換えかア？」

「ガビーン!? こうなったらアクやん! 新たなコンビ決定や!」

「うるせェ。勝手にあだ名付けンじゃねェ」

「ならいいんだけど」

それだけ確認できればいい、と皆の元に戻り、旅館に入る所で、

「え!?! 何で上条さんがここに!?!」

「やっほー、兄貴ー」

「にゃ!?!」

そこに居たのは、『男』の御坂美琴と、研修や何やらでついて来た『女』の土御門舞夏とご対面。

青髪ピアスをベクトル操作を使って地面に沈め、私たちの元へとやって来た一方通行。

しかし、そこに居たのはかつての敵でオリジナルの御坂美琴だった。

「ンだとっ!?! オリジナルまで男になってンのか!?!」

あー、うん。そりゃあ、驚くか。

それ以外に言うことが見つからず、私の肩を掴んで御坂の方へ押し

やる一方通行。

私は鞆につまづきながらも、綺麗に御坂の胸へとダイブ。

「上条さんって以外と大胆なんですね。俺、うれしいです」

（ミスツた。オリジナルは最弱のことが好きなんだよなア）

至近距離で微笑まれ、赤面した私は後退し、後ろにあった鞆に足を引っかけ、盛大に転んだ。

「いったあ……」

「痛い！ってミサカはミサカは一方通行の鞆の中で人知れず叫んでみたり！」

「……アア？今、ミサカ？打ち止め？^{ラストオーダー}なんでお前ついてきてンだア

！黄泉川ッ！ンでこいつがここにいるンだよッ！！」

隣の自分達のクラスに向かつて叫ぶ一方通行。^{アクセラレータ}

なるほど、彼ならベクトル操作して重い物を重くないようにするこ
とが出来る。

もしかしたら、荷物を詰めたのは他人任せだったかもしれない。し
かし。

クラス一同「（いくら何でも気づくだろう……普通）」

「あー、持って来ちゃったのはしょうがないじゃんよー。一方通行
が責任もって世話してやるじゃんよー」

とてつもなく棒読みな黄泉川先生。知ってて持って来たに違いない
！！

「付いて来てしまったものはしょうがないんだよーってミサカはミ
サカは一方通行に抱きついてみたり！」

「開き直ってンじゃねエぞこのクソガキっ！っつか、さっさと離れ
やがれ！」

打ち止めの頭を押え込みながら叫ぶ一方通行。

「あああ頭ー！痛いっ！助けてってミサカはミサカは……はっ！！」
呆然としている私と御坂の後ろに隠れる打ち止め。

「パパー、一方通行がいじめるって、ミサカはミサカは告げ口して

「みたり！」

「パパって、俺のこと？それはいくら何でも無理があると思うぞ」

「上条ちゃん？　どういふことですか？　はっ！　そうやって並んでみるとその子、御坂さんにそっくりなのですよー」

「オイオイ、もうちよつとマシな嘘付けよチビ御坂。それじゃあバレだぜ」

と、否定する優一。

「ああ……、あの時の女の子か、えーつと？ 打ち止め？ 御坂、妹の妹よ。お前、一方通行と仲いいのね……、まあ、そんなに悪人でもなさそうだし……」

しゃがんで目線を合わせる私はきつと良き保護者。（に見えるだろう）

「か、上条ちゃんが母親っぽいです!?! やっぱりその年で過ちを!」

「いやいや、先生、違いますって!! ねえ、美琴さん?」

「えっと……、つまり俺ら夫婦ってこと（／＼／＼／＼）」

「ちよつと、何赤くなつてゐるのよ、うつわ、私まであかくなりそー
ー」

「この類人猿がアアアアアアー！」

「その頭をカミチギル！」

笑顔で鉄矢を浴びて、
噛み付きました。

鉄矢の方は、優一が、

「H a — h a !
(和訳；ハッハー！)

とりべりオンで撃ち落としてくれました。

いや、テレポートしたのを撃ち落とすってどんな速さよ。

と思って優一をみたら、『REBELION』ではなく、リベリオン
 オンを変化させた紅い刀身の片刃の大剣、その名も『RED
 QUINTON』を左手に握っていた。

ちなみにインデックスの首根っこも掴んでいた。
ありがたい。

「何で白井がいるの！？学年違うでしょ！？」

「お兄様……いえ、生徒を守るためです」

……、男になっても、百合的尊敬は変わらないのね。

「普通に考えて、当麻が4歳の時に出来る訳がねえぞ？何考えてんだあんたら？チビガキは超電磁砲レールガンの妹だろーが」
と優一に絶対零度の視線を向けられた。

遭遇。
(後書き)

いかがだったでしょうか？
次回は波乱の部屋決めです。
それでは。

波乱の部屋決め!?(前書き)

はんせいしております、一方通行!?! いや、悪気は、ギャアアアア
アアアアアアアアアアアアアア!?!!!

波乱の部屋決め!?

「つうかよオ、打ち止めどこに寝かせンだよ? オレの部屋は獣(と書いて青髪ピアスと読む)がいるから無理だろ? 黄泉川、どうすんだよ?」

「あんた達のところにこの子を預けるのはものすごく不安だけど俺の部屋にも獣(と書いて黒子と読む)がいるんだよな」と言う一方通行と御坂。

「じゃあ、優一達の部屋は?」
と言う私。

「やめとけ。余計な戦闘に巻き込まれるのがオチだ」
一体何をやらかしたんだ、優一は。

そう思った私の心を読んだかのように優一は言った。

「『反物質砲』で国一つ滅ぼして、島消し飛ばしたりしたから、恨まれてるのは確かだ。それに貴族の連中もまだまだ諦めてはいない。規格外同士の戦いに巻き込まれたくはないだろう?」

反物質。量子力学上存在する物質の対になるもの。反物質と物質が衝突すると対消滅が起こり、莫大なエネルギーを放出するとされる。その莫大なエネルギーは桁違いの威力を誇るらしい。

理論上は1?の物質と反物質を対消滅させると、 1.8×10 の17乗ジュールになるといわれている。(全て優一の受け売りです) また、反物質に触れた時点で私達は消し飛んでしまう。

優一曰く『悪魔ってのはどんなに雑魚でも、この世に現出した時点で、自分達の都合のいいように世界を改変できる』のだそう。

本人曰く『反物質に触れていても、身体が消し飛ばないように世界を改変すればいい』ということだそう。

規格外にもほどがあるだろ。
いけない、話がずれた。

クローンであるのがバレたらまずいので一方通行の応援をする。

「逆に考えれば、私達の部屋から青髪を追い出せばいいんじゃないかしら？ 土御門はロリコンだけど、義妹以外には手を出さないロリコンだしね」

「ちょ、ちょっと困りますよ！ なにもせんから追い出さんといて！」

「これは決定事項だし、信用ならんにゃー。井伊のどこでも行けばいいにゃー」

と冷たく突き放す土御門。

「一方通行はこれでいい？」
と確認を取る私。

「……まあ、打ち止めはどうなんだよ」

「アナタと一緒にの部屋はとってもうれしいかも、ってミサカはミサカは両手を上げてみたり」

「ちょ、ちょっとお」

明るい雰囲気の私たちと、それにすがる獣（と書いて青ピと読む）のお話。

「待ちなさい！ いくら小学生（？）でも女子が男子と一緒にの部屋でいいわけないでしょ！」

「その子は。私たちの部屋で。預かる」

「いやだーって、ミサカはミサカはあなたに抱きついてみたり」

吹寄と姫神から逃げるように一方通行に抱きつく打ち止め。

「にゃー、本人はこういつてるぜい？」

「どうすんです、ロリ先生」

……小萌先生のことをロリ先生と呼ぶのは優一だけなのよね。

「僕らの所は多分、貴族どもが雇った殺し屋なりなんなりが襲撃する可能性もあるし、僕も本業が溜まってるので、片付けなければならねえからな」

本業……悪魔殺しのことかな？

少しの沈黙が私たちを覆ったとき、井伊が提案した。

「先生、提案があります。多分あの子を別の部屋に置いても抜け出

すだけだろうし、あぶれた青髪を受け入れてくれる人もいないと思います。ていうか御免です。ここのクラスの男子だけでも大部屋に雑魚寝にして、みんなで見張れば問題ないと思います」

「むむむ、たしかにそうだにゃー」

「何かずいぶんと酷い事言われた気がするんやけど」

「男はみんなケダモノ。むしろ群れる方が危険。女子の部屋に。簀巻きにして転がして。置いた方がいいと。思う」

「そう言えば、優さんはどうなるんや？」

「え？ ああ、僕たちは別館ですよ」

「せこいやん！ おかしいやん！ フィオナはんとエリシアはんと一緒にやろ？ 明らかダメやん！」

「僕はファナ様の護衛ですよ？ 護衛が側にいなくちゃ、護衛の意味が無いでしょう？ ……それに、一応、そういうことをしても良い関係ではありますから」

「ってコラ！ 何言ってるのよっ！」

と真っ赤な顔で抗議するエリシアを華麗にスルーしつつ、優一は言った。

「あなたがたも、飛空戦艦の砲撃を部屋にブチ込まれるのはいやでしょう？」

飛空戦艦。優一達がイギリスから脱出する時に追って来たと言う魔術的な最新兵器。

その通り、空を飛ぶ戦艦である。イギリスでは、飛空空母を中心とした機動艦隊を組んでいるらしい。

ってまた話がそれたよ……。

「簀巻きはやめてーってミサカはミサカは涙目で訴えてみたり。ママ助けてー！ とミサカはミサカは今度はママに助けを求めてみたり」
「えっ……ママって私！？」

ちよっとな……。／／／

誤解を招く発言はやめて欲しいなあ。打ち止めさん？

「出来ればパパとママと一緒にの部屋がいい、とミサカはミサカは希

望を口にしてみたり」

「よしじゃあこうするじゃんよ！。その少年、もし良かったら打ち止めと一緒のへやじゃん。アクセラレータ一方通行と上条（女）もいっしょにするじゃん。

ああ、打ち止めになにかあったら一方通行が大変なことになるから安心じゃん。一方通行はいつも一緒に寝てるし。極めつけに災誤先生と一緒に部屋をたのむじゃーん♪」

上条（女）ってなんだ、上条（女）って。酷いんじゃないの！？

その少年は嫌だったらいいいからね。と黄泉川先生。

まあ、災誤先生と一緒に部屋はイヤだし……と納得し始めたクラスの間々。

一番不幸だったのは私に違いない。（男子と同じ部屋に入れられたよ！？私も女子だよ！？）

そんな中一方通行だけは吠えていた。

「ヨミカワアアアッ！！！！いつも一緒に寝てるとかテキトーコイてんじゃねエエー！！！！」

「嘘はついて無いじゃん？この前も打ち止めを抱き枕代わりにしてたじゃんよー」

（そのとき一方通行は寝ぼけていたと言う大事な所は話さない黄泉川）

シュランッ。

ジャキンッ。

この場には不釣り合いな金属がすれる音がして、そちらを見てみると、エリシアが腰の長剣『亡霊殺し』フアントムスレイヤーを抜いていた。

もう一つの音は、優一が格闘武器『衝撃鋼』ギルガメスを手と足に装着。

と、思ったらフィオナさんが必要ないはずの魔術の詠唱をしている。確か優一に聞いた所によると、フィオナさんは、通常必要ない魔術詠唱をすることで、その威力を限界まで高め、さらにその限界を突破することが出来るとかなんとか。

「…………、ヤバくない？」

「ま、まずいにゃー」

あ、土御門も冷や汗かいてる。

驚くことに、世界最強レベルの魔剣士（優一のこと）と魔術士2人は、断罪の言葉まで同じだった。

「「この変態ロリコンアルビノもやし野郎が……………!!!!!!」」

…………、驚くほど息びったり。

『SHOCK!』
ショック

優一は衝撃を蓄積した右腕を地面に叩き付け周囲に衝撃波を発生させ、

『火炎嵐!』
ファイアストリーム

エリシアは剣を媒体に風と炎の複合術式を発動、

フィオナさんに至っては、

『星降る夜!』
スターナイトレイン

聖なる星の光を集め、魔力で造り出した女神がそれを降らす聖属性の術式を発動。

「「「ギャアアアアアアアア……………!!!!!!」」」

………………。その結果、周囲に甚大な被害が出た。

私はその『甚大な被害』に関してはノーコメントでお願いします。

……、まあ、手加減はしていると思うけど。

「はいはい、いつまでも遊んでないで旅館へいくじゃんよー。ここにずっといたら旅館の人に迷惑じゃん」

黄泉川先生の声に促され、続々と旅館に入って行く私たち生徒。

一方通行と、とぼっちりを食らった土御門と青髪ピアス。

彼らは、3人から受けたダメージが回復するまで、寒空の下に取り残されるのであった。

「こういうのは、いつもやったらカミやんの役やないの？」

「……………、クソツタレエ」

「ふ、不幸にゃー」

「おーい、大丈夫かー、兄貴ー？」

しゃがみ込んで、焦げた兄を木の棒でつつく義妹。

波乱の部屋決め!?(後書き)

申し訳ございませんでした。
反省しております。

外伝―強さランキング! (前書き)

えー、10部突破記念として、独断で申し訳ありませんが、オリジナルキャラ込みの強さランキングを勝手に作りました。

こんな感じで、10部増えるごとに、外伝を書こうと思っています。

外伝ー強さランキング！

今回は、10部突破記念として、独断失礼ですが、この小説に出てくるキャラの強さのランキングをしたいと思います。

それでは、始まり始まり！

第一位ーーー 七城優一（魔人Ver）

デヴィルトリガー
魔人化状態の優一。この状態だと、右方のフィアンマさえ寄せ付けぬほどの圧倒的な力を誇る。

その力は、『人間界』が歪むほど。

第二位ーーー フィオナ・ハーベル（解放状態）

『ウェスタの巫女』の力を完全解放した状態。伝説級の魔術を、フィアンマ以上の速度で連続で発動するなど、魔術界に置いてはチートレベルの能力。

第三位ーーー 右方のフィアンマ&一方通行（黒翼Ver）

フィアンマは原作敵キャラの中では最強だと勝手に思う。一方通行の最強形態（笑）とにかく強い！神々しい！

第四位ーーー 後方のアックア&七城優一（通常Ver）

ダークスレイヤー

『闇を殺す者』と称される優一（通常Ver）と互角に打ち合ったからかなり強い。格闘戦も含めて世界最強レベル。

七城優一（通常Ver） 「とある少年の転生人生」の主人公。アンノウンライフ

タイリツシュな剣術と、クレイジーな射撃で、世界最強レベルの力を持つ。

第五位ーーー

ナイトリーダー
騎士団長&ロイ・ミイス

後方のアックアにはわずかに及ばないものの、神裂を圧倒するほどの力を持つ英国騎士最強の男。

『守護者』^{ガーディアン}の異名を持つ練達の剣士。使う剣は、聖なる太陽の力を封じ込めた『太陽剣』^{シャイニングブレード}

剣術だけなら、騎士団長に匹敵する力の持ち主。

第六位――フィオナ・ハーベル

魔術界の至宝である、絶世の美少女。イギリス七大貴族の筆頭の出身。

特殊能力『ウエスタの告示』により、魔術を霊装、詠唱、魔方陣の必要無しで発動するなど、対魔術に関しては最強レベル。

彼女の歌う歌には回復魔術の効果がある。

しかし、格闘戦には非常に弱い。

第七位――神裂火織

ウエスタンルックサムライガール。『神裂に勝てるのは神か天使だろう』と称される聖人。実際そうでもない気がする。

第八位――一方通行（通常Ver）

学園都市最強の男。しかし、脳に重傷を負っているためこの順位。

第九位――削板軍覇

『世界最高の原石』である根性男。

御坂美琴のレールガンを歯で止めるなど、とにかくめちゃくちゃな暑苦しい野郎。

第十位――エリシア・ミイス

ロイ・ミイスの妹。類い稀な才能に恵まれ、その魔力はキャーリサ王女と並び称される才色兼備の美少女。四大属性、聖属性、闇属性、重力魔術、無属性魔術、回復魔術、武器強化術式など、多種多様な

魔術を操る魔術師でもある。

また、剣の腕にも、体術にも、非常に優れている。

また、フィオナの専属侍女でもある。彼女の料理は絶品。
ある意味一番凄い人。

第十一位――御坂美琴

いわずと知れた常盤台の『超電磁砲^{レールガン}』

でもスルーされるなど、残念な役割。

第十二位――浜面仕上

無能力者なのに学園都市四位を倒した凄い人。
滝壺ラブ。

第十三位――麦野沈利

無能力者に負けちゃった残念なレベル5。

優一に右腕を斬り飛ばされるなど一番かわいそうな人。でも立ち直
って和解した健気な人。

こんなものでしょうか。

オリジナルキャラ込みです。

自分の独断なので、気にしないでください。

外伝ー強さランキング！(後書き)

何度も書きますが、独断です。

今回は本編です。

それでは。

珍事件!?(前書き)

今回はほのぼの空間その他が広がっております。

珍事件!?

ところかわって、宿泊予定の部屋。

「へえ、けっこういい部屋ですね……」

「そ、そうね……（ここで御坂と朝まで!?!）」

「上条さん、顔赤いけど大丈夫か? せっかく旅行来て風邪引いちゃつまらないですよ?」

と言って、私の額に手を当て、体温を確かめる御坂。

イケメンが近くに居たらそりゃ赤くなるでしょうに、人の気も知らないで。

「んー、ちょっと体温が高い気もするけど」

「だ、だじゅぶ!」

か、噛んだ!

「あははっ! 上条さん、かわいい」

（アッブねー、理性飛びかけたよ）

「う、うるさい!」

と、獣になりそうな御坂の心を分かるはずも無い上条。

（視点が定まりません。お気をつけ下さい）

「うー、何か忘れられてる気がするってミサカはミサカは一生懸命自己主張してみたり! おーい!」

と、ぴよんぴよん跳ねながら一生懸命自己主張するが虚しくも部屋を占拠する上条と御坂の桃色空間により、完全に閉め出された打ち止めであった。

（オリジナルのヤロオ……、スクラップにしてやろうかア?）

と同じく蚊帳の外ながら、激しい嫉妬の炎を燃やす一方通行。

「うー、パパとママがラブラブで構ってくれないってミサカはミサカは悲しんでみたり」

パパ、ママと呼ばれるのには、激しく反応する2人であった。

「ちょっと、ラブラブってそんな、違うよっ！」
と否定する私。

「パパママはいい加減やめてくれ……」
と困ったように頭を掻く御坂。

「ダメー!とミサカはミサカは力いっぱい拒否してみたり!」
「打ち止め?どうしてかなあ?」

となんだか怖い笑顔で打ち止めに近寄る御坂。

「その呼び方が一番しっくりきたのだ、とミサカはミサカは素直な
感想を述べてみたり」

「……………、どう反応すればいいかしら?

「あー、もう分かった分かった、好きにしてくれ」
結局あきらめたのかよっ!

「もう……ふふっ。私は別に構わないわよ?」

こういうのはあきらめが肝心よね。

と思いつつ、思わず漏らした笑みに3人の視線が集中した。

(か、かわいい……)

(こいつは……、絶対離せねエなア)

(なにか、負けた気がするってミサカはミサカは頬を膨らませてみ
たり)

もっとも、一方通行だけは、改めて上条を守ると決意していたみた
いだが。

「なんやー!このほのぼの空間はー!」

「カミやんにこんな空間は似合わないにゃー!こんな幻想ぶち殺し
てやるにゃー!」

(そしてカミやんを俺だけのものに……!)

土御門&青ピが襲撃して来た……、何をやってるんだお前ら。

「つウウウウちみかどくウウウウん!?!」

(三下との時間を邪魔してんじゃねエ!)

「あんたらああ!!!」

(せっかく上条さんといい雰囲気だったのに!)

史上初。ブチ切れた第三位と、第一位が一緒に能力を使った。何故ブチ切れたかは分からないけど。

そして……15秒後。

「さ、さすがレベル5、瞬殺にやー……グフッ」

「だから、これはカミやんのポジション……ガクッ」

黒焦げにされました。

「えーっと、お二人さん？」

「大丈夫。手加減はしておいたから」

「こんな三下殺す気もおきねェよ」

その頃、上条の部屋の部屋のそとでは……、中を伺う人影が。

「お兄様……、何故このようなことに」

そこにいたのは『女』の白井黒子。どうやら御坂美琴を思うあまり、女性に戻ってしまったらしい。

(あの人はやっぱりあの時の!?!? こんな所で会えるなんて!?!?)

と、上条を見て驚く初春飾利。

「初春? 聞いてますの?」

「は、はい!?!? な、何ですか!?!?」

相当テンパっている初春。

「どうかしましたの?」

「うーいーはるーん♪何やってんの? 白井さんもなにしてんです?」

盛大に初春のスカートをめくりながら佐天登場。

ちなみに佐天は七城優一がフラグを立てたため、『男』になっていない。

「!?!?……」

初春慌てる。バランスを崩す。ドアに頭をぶつける。

「まるで私がおまけの様な言い草ですね、佐天さん。……初春は本当に何をやっていますの?」

真っ赤になったまま、いい音立てた頭を抱える初春。それを見下ろす白井。それを見て、ケタケタ笑う佐天。

その頃室内では……。

「えーっと、これから集合時間まで時間がたっぷりあるけど、どうするのかしら？」

「温泉はいりたーってミサカはミサカは興奮気味に言ってみたり！」

「温泉……、もう入っちゃっていいのか？入浴時間とか決まってるじゃないのか？」

「多分、そうよ。人数が人数だからね」

「残念でした。打ち止め。もう少し我慢しろよ」

うん。こう見てると、仲の良い兄妹にしか見えないよね。

実際は、オリジナルとクローンだけど。

「ぶーぶーって、ミサカはミサカは不満たらたらにブーイングしてみたり」

「うるせえんだよクソガキ！黙ってテレビでも見てろっ！」

「あー、そうですね、もめ事は嫌だからテレビつけましょう」

とテレビの電源を付ける私。

画面にはいきなりAVチャンネルが映し出される。

ピシッ、と固まる私たち。

「上条さん……！」

「いや、ちょっと待ってよ！いまの絶対私には責任ないよ！むしろ学生が泊まる部屋にこんなの設定していた旅館の人が悪いと思うんだけど！？」

ちなみに今は保護者がチャンネルを変えて打ち止めがカナミンを見ている。
アクセラレータ

珍事件!?(後書き)

次回はオリキャラ&一方通行活躍のバトルです。

V S 魔界生物! (前書き)

今回、オリキャラがチート化したかもしれません。

VS魔界生物!

「オイ三下ア。女風呂の時間だつてよ。このクソガキを連れてつてくれ」

「え? あ、いいよ」

カナミンが終わったぐらいの時間、女風呂の時間がやって来た。

「ほら、打ち止め、行こう?」

「分かった、ってミサカはミサカはママと手を繋いでみたり」

私は打ち止めの手を引いて部屋の外に出た。

さあ、お風呂に行こう、と足を向けた所だったのだが。

「きゃあああああっ!!!」

という悲鳴が旅館全体を貫いた。

この旅館は私たちだけじゃなくて、一般のお客さんも泊まっている。この旅館の裏には大きな泉と山があり、静かな観光名所になっているらしい。悲鳴はそちら側から聞こえて来たようだ。

「な、何……今の悲鳴」

「きゃー! 怖いよー! って、ミサカはミサカはママの腕にしがみついてみたり」

「ば、化け物だああ!」

化け物? 一体何のこと?

「すいません、一体どうしたんですか?」
と旅館の人に尋ねる。

「どうやら、裏の泉に何かが現れたみたいです。何ともよく分かりませんが、巨大な蛙の様な生物だとか……」
ものすごくイヤな予感がする。

「とりあえず、優一達に連絡しなきゃ!」

携帯電話を取り出して優一に電話をかける。

プルルル……、と二回ほどコールがあった後、優一が電話に出る。
『もしもし?』

『もしもし優一？上条だけど、至急こっちにきてほしいの』
私の真剣な声音に何かを感じ取ったのか、優一も真剣な声音で応対する。

『どうした？そんな深刻な声音して？』

『本館の裏の泉に化け物がでたんだって』

『化け物だと？どんなのだ？』

『巨大な蛙のような化け物だって』

ガタンッ！

電話の向こうで何かを落としたのか、凄い音が聞こえた。

『ゆーいち？どうしたの？』

この声はエリシアかな？

『裏の泉に化け物が出たらしい。ファナを守っていてくれ』

『分かったわ』

『悪い。巨大な蛙ね……。喋ったか？』

『ううん。そこまでは分からない』

『そうか……。僕も行く。そこを動くなよ』

『ごめん、優一。もう裏口に出ちゃった』

『……。この大馬鹿野郎！』

『ご、ごめん』

『もうおせえだろうが。ったく。土御門と一方通行は？』

『今、見えたよ。こっちに來てる』

『分かった、じゃあな』

「三下ア！お前はただの女だろ！下がってろ！」

「カミヤん！宿に戻っている！はつきり言う。邪魔だ！」

「たくっ！お前はただの女だろうが。黙って守られとけ」

優一までそんなことを言うか！

「無理よ。私は、知り合いが血を流すのを黙って見てられない。守られるんだったら、なおさらよ！お願い……。一緒に居させて！」

「言ったって聞かねえだろう。むしろ、こう言った方が当麻らしい」
「クソツタレが」

「ま、カミやんだからにゃー」

「だったら私たちもいいでしょ？」

「ブーーーーーッ!!!」

あ、優一が吹いた。

「ちょっと待て！何でファナ様とエリシアがいるんだよ！」

「私は、あなたのおかげで生きてる」

優一の抗議に対して、フィオナさんは静かに言った。

「……」

そのまま、しばらく見つめ合う2人。

「……、分かりました。背中任せます」

目で会話したのかよ！どんだけ凄い絆なんだ！

「エリシア、無理はするなよ」

「もちろんっ」

「じゃあ、行こうか」

私たち六人は、泉へと歩を進めた。

あ、打ち止めは御坂に預けて来た。

泉に到着。

「キシヤアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!」

あー、うん。蛙の化け物だね。

「優一、これは？」

フィオナさんの至極当然な質問。

「マッドウーパー。魔界に生息する巨大な水棲生物。まあ、こいつは小さいサイズだろう」

小さいサイズって、おい。

「ちよっと待つにゃー。小さいサイズって言っても、こいつは10mはあるにゃー」

「小さいサイズにしては、明らかでか過ぎるぞこいつはよオ」

「魔界の平均サイズは30mだ。最大、350m」

「……………、突っ込みをいれるべきなのかしら。」

「あー、そりゃ、小ちゃいにゃー」

「だなア」

「来るよっ！構えろ！」

エリシアの叫びと同時にマッドウーパー？は大口を開けて、って食われるっ！

「任せとけっ！」

『AIR ROYAL BLOCK』
エア ロイヤル ブロック

『悪魔の力』を敵との攻撃接触面に集中させ、攻撃を防ぐ技。

『BLOCK』の上位版。それが『ROYAL BLOCK』。
ロイヤル ブロック

ブロックの場合は多少なりともダメージを食らうが、ロイヤルブロックの場合はノーダメージでやり過ごせるのだそうだ。

それを優一は空中でやった。

ガキンッ！と音を立てて、食おうとしたのをブロックした優一は、バク転して距離を取る。

「食らいやがれっ！」

一方通行は、木の枝をベクトル操作して投げ飛ばしている。

だが、あんまり効いた様子がない。

うざったいのだろうか、そっちに顔を向けたマッドウーパーは、背中中の触手を一方通行に伸ばして来た。

しかし、反射に弾かれる。

「ゴグガアアアアッ！」

マッドウーパーはフィオナさんへと火の玉を吐いた。

私は優一がまた、鬼気迫る表情をしているのだろうか、と、優一を見る。

ところが、優一は平然として背中の大剣、『RED QUEEN』
レッド クイーンを構えていた。

「大いなる我らが民よ、その力を持って我を護り賜え……」

『防護の盾』
フロミス

その言霊と共に、フィオナさんの前には虹色の光が現れ、火の玉を受け止め、消した。

「食らえっ」

とエリシアが長剣を抜いて斬り掛かるが、まったく効いた様子が無い。

「チッ！」

思わず優一も舌打ちをする。

「防御力の高さが異常だ。突然変異した個体じゃないか？」
土御門は真面目な口調で分析する。

「ハッ！なら試してみようじゃねェか」

「少しは楽しめそうだ」

その言葉を受けて学園都市最強の2人が獰猛な笑みを浮かべる。

「Crash！」（和訳；壊れろ！）

優一はテンションが高くなったり、戦闘になったりすると英語が飛び出す。

『STREAK』
ストリーク

強烈な突進から繰り出す斬り払い攻撃。

前方の広い範囲を攻撃する。

ズバァッ！

その強力な斬撃は、マッドウーパーの顔面を斬り裂いた。

「Ha！ Is that all you've got？
Then down to hell you go！」（和訳；ハッ！燃料切れか？だったらそのまま寝てろ！）

その言葉と共に優一は口の中に剣を突き刺した。

「ゴガァァァッ！」

そりゃあ、痛いと思う。

「吹っ飛べ！」

優一はそのまま、マッドウーパーごと剣を振り回して地面に叩き付けた。

「なんて力なの!？」

私は驚いて大声で叫ぶ。

「……まア、アイツも対外、人間やめてるからなア」

「「あんたが言うなっ!!」」

私も含む学園都市出身は一斉にツツコミを入れた。

「そうかア？」

……。自覚なかったんかいっ!!!

なんて会話をしていると、マッドウーパーはなんとか起き上がり――訂正、優一に蹴り飛ばされた。

ちなみに、かなり野次馬が増えて来ている。

今すぐ飛び込もうとする御坂を白井が必死に押さえているのも見えた。

「離せっ! 黒子! 俺を離せっ!」

「嫌ですわ! お兄様が行っても邪魔なだけですの!」

「なぜそう言えるんだ!」

「第二位と第一位が居て、あれだけ苦戦しておりますの。お兄様があそこに飛び込んで無事で居られる保証は全く持ってありませんわ!!!」

「ふええ……、なんですかあれは」

「初春落ち着いて。こっちにはこな……!!」

ズドン!!

蹴り飛ばされたマッドウーパーは何と空中で態勢を立て直し、御坂達の近くに着地した。

「御坂! 逃げてっ!」

「速く逃げろガキ共っ! 犬死にしたくねえだろ!」

「ああもうっ! 迷惑よ!」

エリシア……、酷い。

「くっ!」

バチバチッ、と紫電を鳴らして御坂が構える。

後ろに少女を庇いながら。

「超電磁砲！邪魔だっ！女共引っ掴んでさっさと逃げろ！」

「分かった！黒子！」

「了解ですよ！」

ヒュンッ！

白井が少女2人と共にテレポートすると、御坂は電撃を放ち、マッ
ドウパーを牽制する。

「テメエ……！死んでも知らねえぞ！」

いやいや優一、そこは逃がすでしょ？

ヒュン！

「うわっ！」

「きゃっ！」

「ふああ！？」

「わあ！」

ドサドサドサ！

……、私の上に白井達が落ちて来た。

「いたた……。大丈夫？」

「すいませんですよ……」

「だ、大丈夫です」

「痛い！腰撃った、じゃなかった腰打った！」

えーと、白井は分かるけど、後の2人が分からないなあ。

「あ、紹介してませんでしたの。頭に花のカチューシャを乗せているのが初春。髪の長い方が、佐天さんですわ」

「初春飾利です。よろしくお願いします」

「佐天涙子です。よろしくですよっ！」

「上条当麻です。よろしく」

「当麻テメエこの野郎人が必死に食い止めてるのに何のんきに自己紹介してんだコラ！」

「後ろで優一が叫んでいるけど無視してね」

「シカトかテメエー！！！！！」

後ろで優一が叫んで以下略。

「第二位とは何度も顔を合わせてますわね」

「へ？ そうなの？」

と、私は白井がこぼしたその言葉に驚く。

「そうなんですよー。七城さんは銀行強盗をした能力者だとか、常盤台のお嬢様を誘拐しようとした能力者だとかを取り押さえてくれたんです！ いやー、かつこ良かったです」

「優一さんに直接助けられたこともあるんですよ！」

へえ、あの優一がねえ……。

私は敵に対して容赦のなさすぎる優一を見て来ているため、その言葉信じられない部分があった。

「上条さん？ どうかしましたか？」

初春さんが顔を覗き込んでくる。

「ああ、いや、私の知っている優一は『取り押さえる』じゃなくて『遠投のボール』にするだったからなあ」

「「『遠投のボール！』」「」」

そうだよねえ。驚くよね。

「どどど、どういふことですか！？ あの優しい優一さんが殺人なんてするんですか！？」

佐天さんだけ『優一』呼びつてことは彼のことが好きなのだろうか。

「佐天さん、今まで思っていたんですけど、何で『優一さん』なんですか？」

おお、初春さんが質問した！

「え、あ、そ、それは……うう」

「佐天さん、私も聞きたいですの」

おお、百合の白井までが食いついた！

「い、言わなきゃだめ？ うう……」

佐天さんは、顔を真っ赤にして、その発育の良い身体を縮めた。中1でこのプロポーションは期待できるよね。色々と。つていうか何このかわいい生き物。

「王子様みたいだったから……」

「「メルヘンだね（ですわ）（です）」」

「だからテメエ当麻この野郎人が必死に食い止めてる時に何世間話に花咲かせてんだクソツタレ！」

後ろで優一が叫んで以下同文。

「話が横道にそれましたわ。第二位が人を『遠投のボール』にするとはどういうことですか？」

「それと！あの水色の髪の人と、栗色の髪の人との関係は！」

おお、佐天さんまで食いついて来た！

「いい加減にしろーっっっ！！！」

あ、優一がキレた。

フランクス

モードチェンジ

『武器庫』 『変形』

ミヨルニル

『雷撃の鎚』

優一はスーツケースのような兵器をコートの中から取り出し、一瞬で白い雷を纏ったハンマーへと変形させた。

「Die！！」（和訳；死ね！）

英語を叫びながら、優一はそのハンマーを投げつけた。

グシャッ！！

マッドウーパーの横っ面を襲ったそのハンマーはーっっ骨が潰れる嫌な音と共にーっっ化け物の頭を粉碎した。

「「「「「「……………」」」」」」」

その場にいた全員が沈黙。

「ふー。終わった。この分の金は誰に請求すればいいんだ？」

「「「「「「は？」」」」」」」

「それは、『必要悪の協会』にゃー。俺が請求書を書いとくぜい」「りょーかい」

土御門と優一は小声で何かを話していた。

それから優一は階段の上（つまりはわたしたちの方向）を向いてこ
う言った。

「皆さん！今のことは忘れてください！誰にも喋らないでください！喋った場合、日本国政府より、監視が付けられます！なお、この泉には近づかないでください！」

マジですか……？

「それではみなさん、旅館へ戻ってください！」

優一のその声を合図として、野次馬の人々（私たちの学校の生徒、常盤台の生徒、先生達、一般客）は揃って旅館へ。私と喋っていた3人、戦っていた優一達は残った。

「全員けがはないかによー？」

「ハッ！この俺があると思うのかア！？」

「ないぜ」

「ないよ」

「ないでーす」

軽っ！事後処理軽っ！

「フアナ様、封印できますか？」

「もちろんだよ。任せて！」

フィオナさんは手を水平に振り、一瞬で封印術式を発動させると、それを泉に掛けた。

「さあ、パーティは終わりだ。帰るぞ」

パーティって、おい。

あんな死闘をそんな一言で片付けるなよ。

「優一はいつもあんな感じだから。仕方ないよ」

優しい笑みを見せつつ言ったフィオナさん、幸せいっぱいって感じでいいなあ。

私たちは裏口へと入ると、時間が遅れている女子風呂へと向かった。

V S 魔界生物! (後書き)

次回はギャグパートです。
それでは。

お風呂タイム！（前書き）

少々アダルテイかも！？

お風呂タイム!

さあ、皆待ちに待ったお風呂の時間だー！
って私は何を言っているんだ。

御坂は、黄泉川先生に打ち止めを預けていた。

「お風呂じゃん。打ち止めをよろしくじゃん」

「分かりました」

「おっふる♪おっふる♪ってミサカはミサカは踊ってみたり」

「こーら！迷惑でしょ！ここで踊らないの！」

「はい、ってミサカはミサカは意気消沈してみたり」

私も、すっかり母親（なんでだよ！）してるなあ（笑）

またもや、打ち止めの手を引いて、女子風呂に向かう。

今度は事件起きないよね？

「あ、上条君！」

「あ、白雪！これからお風呂？」

「そうだよ。えーっと、そっちの子が……？」

「そう、御坂美琴の妹。人呼んでチビ御坂」

「ミサカのことをチビ御坂と呼ぶのは第二位だけだよーってミサカはミサカは変な誤解が広まるのを防ごうとしてみたり」

「あ。上条君」

「貴様か、上条」

吹寄に、姫神か。

「あ、上条さん」

「あー！上条さん！」

「上条さん！」

「おー、かみじょーじゃないか」

「上条当麻？珍しい偶然もあるね」

えーっと、白井に初春さんに、佐天さんに、エリシアにフィオナさ

ん。

「ちょっと待ってよ」

そして茜川。

女子の美人所が全部集結しちゃってるじゃん。

常盤台も何人かは女の子なんだけど、その子達はここに来てないみたいね。

「ファナ、なにかあったら大声出せよ」

「大丈夫だよ。エリシアもいるし」

優一……、心配性だな。

「そうだよ。いくら傍若無人な貴族でもこんな所まで軍隊差し向けないでしょ」

と、エリシア。

「そうだといいいんだがな……」

「心配しないで。『あの時』みたいに、死のうとなんてしないから」

「ふっ、頼むぜ。『あの時』みたいな悪夢を、僕に見せないでくれ」

「大丈夫。あなたを1人になってもう、絶対出来ないし、させないよ！一生わたしの側にいること！これは命令だよっ！わたしの騎士^{ナイト}さん？」

一歩間違えるとプロポーズの様な言葉にフィオナさんと優一以外が赤面した。

無自覚でプロポーズレベルのこと言うなんて、優一と同じだよ。

「仰せのままに、我が姫^{マイ・プリンセス}」

うっわあゝ、切り返しがキザだ。

だから2人揃って一歩間違えるとプロポーズ以下略。

「僕は部屋に戻ってる。ゆっくり楽しんで来てください」

「「もちろんっ」」

2人の返事も息ぴったり。

通じ合ってるってこういう事を言うんだよね。

場所は変わって、温泉にて。

まず皆が目を奪われたのは、吹寄のボリュームのたっぷりの胸。巨乳。

「「う、うらやまけしからん……」」

そう思わず呟いたのは貧乳の2人。白井と初春さん。

「やっぱり。いつみても。インパクトが凄い」

と姫神。

ちなみに姫神は平均的な日本人をちょっとスレンダーにした感じ。特に特徴はない。

「うっわー。日本人どころか、欧米人もここまででかいのはそういないよ」

とエリシア。

「そうだね。……、でも、お母様はこれぐらいだった気がする」
「おいおい。どんな家系だよ。」

「「う、うらやましい」」

といったのはまたもや貧乳の2人。つまりは白井と初春さん。

「でも、佐天さんは中1とは思えないプロポーションですわね」
「お、佐天さんに矛先が変わった。」

「いつ見ても、中1には見えませんよね！」

「それ褒めてんのか貶してんのかどっちなのよ初春」
「思わず佐天さんが突っ込んだ。」

「中1でそれは期待できるわね……、谷間にアレをはさ……」
「言わせないわよっ!？」

吹寄ナイス!

エリシア……あんたはなにを言っているんだ。

「谷間に何を挟むんですか？」
初春さん? おーい。

「あら、分からないの? もちろんそれはおと……」
どげしっ!

「いったあゝ。ファナ、何するのさ!」
「そんな事を言っちゃだめでしょう。まったく」

「はーい」

親子かつ！あんたらは！

「エリシアさんはうらやましいですわ」

「は？何が？」

今度はエリシアに標的が変わった！

「そのスレンダーながらも、出ているところは出ているその身体！そして、しなやかさの中に力強さを秘めた肢体！芸術ですわ！」

「まあ、鍛えているからね」

「と、いうわけで、お姉様とお呼びしてもよろしいでしょうか！？」

おいしい、御坂からエリシアに鞍替えか？

「別にかわまないけど……。ねえ、かみじょー」

「なにかしら？」

「この子……。百合？」

……………。

どうお答えすればよろしいのでせうか。

「ノーコメントでお願いします」

「そう……。じゃあファナ、あなたが決めて」

「別にいいんじゃないかな？」

「りょーつかい。いいわよ」

「ありがとうございます。エリシアお姉様……」

この後、エリシアを讃える文章が延々と続いたため描写は控えさせて頂きます。

「でも、フィオナちゃんは凄いよね」

と吹寄。

「何が……。ですか？」

自分が絶世の美少女ってこと自覚してますかねこの方は？

「だって、すごい着やせするじゃない。正確に言うならこれほど見事に着やせする女の子にあったことないわよ」

「そうかな？……………」

ポクポクポクとフィオナシンキングタイム。

「あ、そういえば！こっちに逃げて来る時に優と一緒に寝た事があったんだけど、わたしが起きたら、彼の背中が見えたんだよね。その時わたし水着だったけど」

「「「「「いや、それは多分違うと思う」「」「」「」」」」

私含む全員に速攻で否定され、ぷくくと、ほおを膨らませるフィオナさん。

そんな表情でも、その美貌にはある種特別な吸引力が備わっているらしく、一度視界に入れてしまうと条件反射的に魂が抜き取られ、後はその神々しさに浴するのみ。

「私なんだかのぼせて来ちゃったです。そろそろ上がりましょう」
一瞬だけその場を覆った妖しい雰囲気破るように、初春さんが言った。

「そうだね」

と、皆が同意し上がる。

「じゃあ。私たちの部屋で。ガールズトークでもする？」

皆「さんせー！！！」

次の予定は決まり！

「何か忘れられた気がするー！ってミサカはミサカは自己主張してみたりー！！！」

皆の雰囲気にも一度も発言できなかった打ち止めであった。

お風呂タイム！（後書き）

いかがだったでしょうか。

次回はガールズトークの予定です。
それでは。

ガールズトーク!?(前書き)

……ごめんなさい。

ガールズトーク!?

私たちはいま、風呂の後の恒例行事、ようは牛乳を飲んでいる。皆が飲み終わって一息ついたころ、エリシアが切り出した。

「そうそう、部屋ってどーすんの？」

どうしょっか。

「うーん？ 別館にしちゃう？」

とフィオナさん。

「どうして？」

と、問う私。

それに対してフィオナさんは、爽やかな表情で言った。

「優一はわたしの近衛騎士だから、わたしの命令には従わなくちゃいけないでしょう？」

考えていることが、く、黒い……。

「フィオナ……。どこでそんな事覚えて来たの……？」

エリシアがまるで母親のように言うのも仕方無いことだと私は思う。

「え？ 女王様が、優一に言うこと聞かせるためにはこうしろって」

フィオナさんのその言葉に、エリシアは頭を抱えた。

「あんのクソツタレ女何年もお屋敷の中で純粹培養されてたファナになんて事教えてんだあの万年お祭り女王が！」

エリシアはまるで男のような口調で、こめかみを指で押さえながらノンブレスで言った。

そんな言葉を自国の女王に向かって言ったらダメでしょうに。

みんなこの台詞に度肝を抜かれたのか、固まっていた。（フィオナさん除く）

「あ、いけないいけない。口がすべっちゃったわ」

そんな固まっている私たちを見てさすがにまずいと思ったのか、いつもの口調に戻すエリシア。もう遅いって。

「上条、エリシアちゃんとフィオナちゃんって、一体何者なの？」
吹寄の当然とも言える質問。

まあ、そうだよな。

女王様に向かったため口で話せる時点で凄い人間だよな。

「イギリスの最重要機密さ」

私が口を開こうとしたとき、そう声が聞こえた。

私たちが後ろを振り向くと、風呂上がりの優一がいた。

黒いワイシャツのボタンを全て開け、その鍛えられた傷だらけの体を惜しげも無く外気にさらしている。

下はジーパン。

髪はいつものように白銀色だが、水に濡れてしっとりとしている。
私たちと同年代の男なのに凄まじいばかりの大人の色気が漂っている。

その場にいた女子全員が顔を赤らめた。

「僕は仕事があるから、何かあったら呼んで。Okay?」

なぜ、最後のところだけ英語にして微笑むのだろうか。

その笑顔に当てられて、佐天さんが気絶しかけているぞ。

「うん……」

フィオナさんは少し寂しそうな顔。

「まったく、うちの姫は寂しがりやだなあ」

そう苦笑すると、優一はフィオナさんの前髪を持ち上げると、そのおでこにキスを1つ落とした。

っておい！

何やってんだよ！

「え、う……」

フィオナさんは顔がトマトのように真っ赤。

色白の彼女が赤くなると、余計に目立つ。

「では、行って参ります、我が姫」

優一は微笑み、騎士がするような礼——左手を胸に当てて、頭を下げると、一瞬で姿を消した。

「ま。まあ。別館に。行こうよ」

優一が残した不思議な色気をどうにか振り払い、姫神が言った。

場所は変わって、別館、フィオナさん達の部屋。

「わあー！広い！」

「これは、私たちの部屋とは大違いですわね」

「ここが、優一さんの部屋かあ……えへ☆」

佐天さん、あなたは1人で何をやっているんだ。

「広い……、羨ましい」

「すごい。ひろい」

私に至っては声も出ない。

「とりあえずどこでもいいから座ってよ」

と、エリシア。

「うん、そうだね」

とフィオナさん。

その声に促されたように、皆がストン、と腰を下ろす。

「じゃあ、皆、自己紹介からしましょうか」

と吹寄が切り出す。

「私は吹寄制理、上条と同じクラスよ」

「姫神秋紗。吹寄さんと。詳しくは同じ」

と、まず2人が自己紹介をする。

「初春飾利です。柵川中学1年です！」

「佐天涙子です。初春と同じ学校です」

「白井黒子と申しますわ。常盤台中学一年です。風紀委員をしております」

と美しい礼を決める白井。百合を除けばお嬢様らしいはず……なんだけどなあ。

「フィオナ・スコット・ハーベルです。イギリスの貴族の娘……でいいのかな？」

「身分上はね。私はエリシア。エリシア・ミスよ」

と言って流麗な笑みを見せるエリシア。

それはともかく、中学校の3人娘は、『貴族の娘』発言にあんぐりと口を開けていた。

「き、貴族ですか……」

「お嬢様という領域ではございませんわ……」

「……………」

佐天さんに至っては声も出ていない。

「まあ、身分上の話だけだね」

「どうしてですよ!? なぜ、貴族の方が、学園都市にいらっしやいますの!?!」

「話すと長くなるから割愛するけど、本国でクーデターがあったでしょう?」

「ええ……」

私も含む、その場にいる全員が聞き逃さん、と言わんばかりに集中していた。

「さっき優一も言ったように、わたしはイギリスの最重要機密。クーデターで真っ先に命を狙われた」

「そこを助け出したのが、ゆーいちってわけ」

フィオナさんとエリシアの見事な連携で話がポンポンと進む。

「わたしはその時、自分のお屋敷にいて、そこが焼かれたから、バツキングム宮殿に逃げた。バツキングムの広場に辿り着いた、クーデター軍をたった1人で食い止めたのが優一。その隙にわたしは地下通路から空港に逃げて、飛行機に乗った。優一がそれを始動させて、私たちは学園都市へと逃げた」

「2人を追って来たのが、貴族連合と呼ばれる組織。まあ、権力欲に凝り固まった残念な方々なんだけど、その人達は飛空戦艦と呼ばれる最新兵器まで大量に投入して、2人を追った。圧倒的な敵の戦力に対して、こちらは偵察機一機だけ。その無謀な空戦を突破する様は見物よ。というカイギリスで映画化されてる気がする。たしか、『とある騎士からの協奏曲』だっけ」

「そう、イギリスだと、優一の記録が全て抹消されてるの。貴族連合の手によってね。でも、王室やイギリス清教はちゃんと優一を覚えてるし、優一は確かに生きてる」

「私たちが学園都市に来たのはそんな経緯」

しばらく皆は絶句して、「そうなんですか……」と頷いた。

「ク、クーデター軍ってどれくらいの人数だったんですか？」

「そうね……、こちらに来た人数だけでも100人。優一が足止めた人数はざっと、2000人ってところかしら」

とエリシアが答え、皆は再び絶句。

「そのうちの2人は一方通行にも匹敵する強さだったんだけどね」と私。

そう、騎士団長とキャーリサ王女だ。
ナイトリーダー

その2人と対等以上に戦いながら、軍隊を足止めしていたと思うと、優一の圧倒的な強さには冷や汗が出てくる。

「そ、そんなことより！フィオナさんとエリシアさんは、優一さんとういう関係なんですか！？」

佐天さんはこれが聞きたかったんじゃない？

「うーんと、騎士と姫？主従？恋人？どれだろうね？」
とフィオナさん。

「恋人……でしょ」

とアキレタヨウニウエリシア。

「そっか」

佐天さん、撃沈。

口から煙を吐き出して撃沈。

それと同時に、夕食だと旅館の人が呼びに来た。

ガールズトーク!?(後書き)

ごめんなさい。

ガールズトークになりませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645x/>

とある当麻の性転換

2011年12月17日19時48分発行